

京都学習協の第28回集中セミナー 募集要項

申し込みは、このテーマを学びたいと思う方は誰でも参加できます。
 申し込みの手続きは、簡単です。「申込書」に必要事項を記入し申し込んでください。
 FAXでも申し込みができます(受講料は当日お支払いください)。

講義時間は、午後1時～5時
 (休憩も含みます)
 受講料は、2,500円です。(税込み)
 会場は、京都学習会館
 (上京区堀川丸太町西一筋目上ル)です。

【申込先】
 京都労働者学習協議会
 上京区堀川丸太町西一筋目上ル『京都学習会館』内
 電話(075)841-8141
 FAX(075)821-3665



二・四輪共に駐車場はありません。二条
 城市営駐車場へお願いします。
 地下鉄丸太町駅・二条城前駅から『京都
 学習会館』まで歩いて10分以内です。

京都学習協の第28回集中セミナー 申込み日時 年 月 日		
フリガナ	性別	年齢
氏名:	男・女	才
現住所:		
職場・学園:		
労働組合名:	(全国単産名:)	
電話: 職場()	自宅()	

Intensive Seminar Vol.28

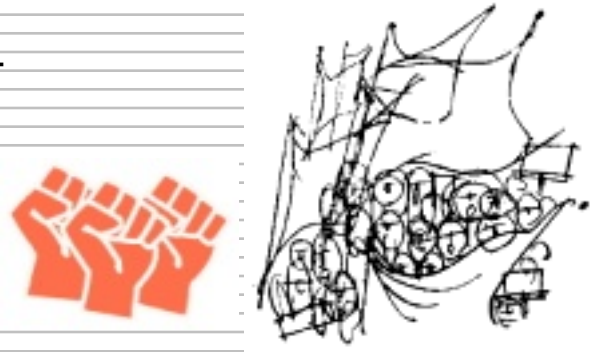
戦後労働組合運動の源流を学ぶ

講師 仲村 富夫
 労働運動研究家

日米安保体制と三井三池闘争



京都学習協 第28回集中セミナー
 日時
 2013年3月31日(日曜日)
 13時~17時
 受講料 2500円
 会場 京都学習会館



学習資料 2
三池争議

安保闘争と並んで、この年(60年)1月から10月にかけてたかかわれた三池炭鉱の首切り反対の争議は、これまでの労働運動史になかったような大闘争に発展しました。日本の石油産業を支配するためのアメリカ独占資本の政策に追随して日本の独占資本は『石炭から石油へのエネルギー革命』=石炭産業斜陽化のつくり話をふりかざしながら、石炭鉱業の『合理化』にのり出してきました。炭鉱労働者7万5千人の首切り『合理化』政策の第一の攻撃目標に選ばれた三池炭鉱は、いうまでもなくもっとも戦闘的な労働組合でありました。これは、三池の首切りの成否が、炭鉱合理化の天王山だということを、資本家側かはっきり意識していたからであります。

1、200名の指名解雇のなかに、400人の職場活動家が『生産阻害者』という名目で含まれていたことが、この攻撃の政治的性格をはっきり示しています。三池の労働者は、全国の職場からかけつけた延べ37万の他産業労働者の協力を受け、海外の労働者をも含めて20億円にものぼる闘争資金カンパに助けられ、一歩もしりぞかずにとたかいました。経営者と全労会議、民社党の工作によって第二組合がつくられ、警察と暴力団と裁判所が経営者に動員され、きわめて困難な状況におかれたにもかかわらず、三池の労働者はこの弾圧と分裂の攻撃に屈せず、英雄的なたたかひをつけました。そしてこの闘争は、安保闘争とささえあい促進しあって持続し発展しました。

しかし、支配階級が資本主義の全般的危機の第三段階といわれる深刻な危機を自覚して、従属的エネルギー政策に活路を求め、『合理化』政策によって必死のまきかえしをはかって、系統的な政策を準備して、総力を結集して襲いかかってきたときに、一企業の局地的な抵抗ではこれをはね返すことはできませんでした。その点で三池闘争といえども企業別組合の視野のせまさと、情勢の政治的把握の弱さを免れることができなかったと思います。同じ三井財閥資本のヤマである三池連の五山の組合は、共同闘争に立たずに三池を見殺しにしました。その結果、あれほどの階級連帯の強化、労働者の戦闘性の高揚を実証したすばらしい闘争でありながらも、ついに1、200人の指名解雇をのんで闘争を終結せざるをえませんでした。

「去るも地獄、残るも地獄」という言葉はウソではありませんでした。

首切り反対闘争に敗北して以後の三池炭鉱では、組合の分裂と弱体化にともなって職場が暗くなり、賃金切り下げと労働強化と災害の増大が伝えられていましたが、ついに一九六三年一月九日、一瞬にして四五〇名の生命を失う大炭塵爆発に見舞われました。これはもちろん、同じ日におこった国鉄鶴見の一六二名の生命を奪った事故とともに、「合理化」の強行がひきおこした人災であります。

労働者は無抵抗でいると生命までも奪われてしまいます。生命を守る運動が労働運動の課題にならねばならぬほど、現在の情勢はきびしくなっています。



学習資料 1
60年の記憶

1960(昭和35)年は、三池争議が起きた年である。そして、日米安全保障条約の改定に反対する人々が国会をとりまいた「60年安保」の年でもある。

その後の日本の行く末を決める、二つの大きな事柄が同時に進行していた。

日本がアメリカのやる戦争に巻き込まれるのか、労働者が大資本にのみ込まれるのか。

私はその時、東京の小学校3年生だった。

連日テレビでは、「安保反対、岸倒せ!」のシュプレヒコールとともに、国会周辺での激しいデモや、警隊とのぶつかり合いの様子が、映し出されていた。

新聞もそれ一色であったし、開けば毎日のように、岸信介首相を皮肉る風刺漫画が載っていた。ちよつと大きな前歯を強調した、出っ歯の目立つ似顔絵であった。

東京中が騒然としているのを肌で感じていた。

子ども心にも、何がなくてはいけない、と思った。私は学校から帰ると、ランドセルを放り投げ、銀行がおまけにくれた紙のランドセルを背負い直した。そして「アンポハン

タイ、キシタオセ」と叫びながら、路地の中にある家の周りをひとりデモこっこをしてみた。

その翌年、春の運動会だ。始まってしばらくすると、キシさんだ、キシさんだというざわめきが始まった。保護者席を見ると、何とその岸信介さんが座っているではないか。

ちよつと郊外の、私立の学校であった。私の一年下の安倍クンと新入生のなつたので、役割を終え退陣したおじいちゃんが観にきたのだ。

昼休みに、サインを求めると子どもたちが殺到した。私も土でドロドロに汚れたプログラムをポケットから差し出し、裏にサインしてもらった。

大きく岸信介と。それは長い間、私か宝物を入れておく、高級クッキー缶の中にあつた。

しかし高校生になり、はたと思っただ。どうも首尾一貫してないぞ。あの時子どもであつても、何かを感じた。倒せ」と叫んだ人のサインを、なぜ後生大事に持っているのだらうか。で、捨てた。

これは私の、ささやかではあるが忘れられない強烈な原点でもある。世の中の動きと初めて呼応した体験だった。

ただ恥ずかしいけれど、同じ時に九州の三池炭鉱で起きていたことは何も知らなかった。でもそれは私た

けではなく、この頃、東京にいた同世代の誰に聞いても、安保のことは覚えていないが「三池争議のことはまったく知らなかった」という。

撮影を始める前に、私は三池争議の映像をまとめて初めて観た。炭鉱という職場からそのまま抜けてきたような男たちと、台所からそのまま抜け出てきたようなエプロンと割烹着姿の女たちが、集会とデモに参加していた。

みな、三池労働のはちまきをきりりとしていた。当時は単なる主婦と言われていた人々だ。若い人も白髪の人も、時には子どもを背負いながらデモのうねりの中にいた。

そこには生活があつた。学生の多かった安保のデモが絵空事にすら見えた。自分たちの生活を守るための、命がけの気迫がひしひしと伝わってきた。追いつめられた切実さがあつた。

日頃の労働で鍛え上げられた肉体が発する強靱さと迫力。私はただただ、そこから放たれるエネルギーに圧倒されていた。

石炭から石油へという大転換。その中で行われた大量首切りに対して、無期限ストライキに突入した。

三池労働者を応援するために、全国から集まった人また人また人の波。あの頃なぜ人々は、あれだけのす

さまじいエネルギーを持ちえたのだらうか。

私には、この三池争議の終わりは日本人が持つ抗議し行動するエネルギーの終焉に思えた。改めて、今私たちは、一体何をやっているのだらうか、とつくづく考え直した。

でもそれだけではなかった。この争議は一年間続いた。労働者の組合は分裂。「総資本対総労働」とまで言われ、日本全国の経営者と労働者の代表がそこで対決しているという図式になってしまった。さらに仲間

やまが二分される悲劇にもなった。それから半世紀。まわりに目をやると、長びく不況の中で、労働の重さやそして労働への誇りすらも失われつつあるのを感じた。

取り戻さなくては。そこへ原発の事故が起きた。今こそあの切実な、内側から湧き上がる、怒濤のような変革への力が必要なのだ。

三池争議の表と裏で起きたことは、今の日本にそのままつながら、まさに現在を描いているのであつた。

